第205回aacaフォーラム
街とアートが織りなす出会いの場（その4）：「ハタオリマチ」視察

フォーラム委員会

開催日：2024年6月15日
引率者：高須賀活良さん・文子さんご夫妻
視察地：山梨県西桂町、
富士吉田市（富士見、下吉田）

今年度のaacaフォーラムのテーマは昨年に引き続き「街とアートが織りなす出会いの場」。今年度初回となる第205回は、第204回「領域をとかす テキスタイルから考えるアートデザインまちづくり」でご紹介いただいた「ハタオリマチ」（山梨県東部の織物の産地）を、講師として登壇いただいた高須賀活良さん引率のもと散策しました。

＊第 204 回フォーラムの内容は、会報 98 号 P11 で紹介しています。

山梨の織物が初めて書物に登場したのは平安時代の法律「延喜式（えんぎしき）」（967年）。「甲斐（山梨）の国は布を納めること」という旨の記述があるとのことです。世界に類を見ない技術力が必要とされた幻の織物「甲斐絹（かいき）」をルーツに発展した「ハタオリマチ」では、今なお、クリエイティブな織物職人達が高品質で魅力的な織物を日々生み出し続けています。

1枚の布を完成させるには、糸を撚る「撚糸（ねんし）」から仕上がった反物を検査する「検反」まで様々な工程が必要となります。ハタオリマチには200を超す糸にまつわる会社や工場があり得意とする技術を分業し街全体で織物を生成しています。

視察は、高須賀さん編著によるハタオリマチの織物を楽しく学べる教科書『ハタオリ学』の抜粋版となるパンフレットを手に、まずは工場視察から街の営みの様子見学まで。いざ出発です。

ハタオリ学

◎世界で最も細いシルクカシミアを扱う「武藤」では主に撚糸について視察。消え入りそうな細さの糸を扱う技術に驚愕です。

武藤

◎世界で唯一織物から傘の組み立てまで一貫したものづくりを続ける傘工房「槙田商店」では主に染色について視察。伝統技術を応用した傘づくりに感嘆するばかりです。

槙田商店

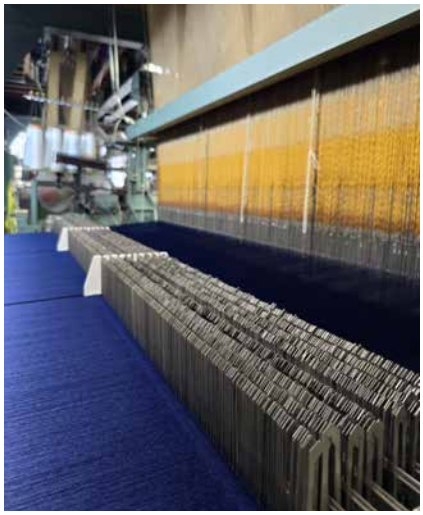
◎竣工したばかりの西桂町役場（設計：隈研吾）を視察。ハタオリマチらしく布（「槙田商店」製作の生地）で装飾された壁面やサインは見応えがありました。

西桂町役場

◎ランチは郷土料理「吉田うどん」で腹ごしらえ。この「吉田うどん」。織機を動かすのは女性の仕事だった昔、行商担当の男性が、女性の作業を滞らせないようにと昼食にうどんをつくるようになったのが発祥なのだとか。男性が強い力で地粉をこねたことで太くてコシが強いうどんになったとのこと。

◎座布団専門の織物工場「田辺織物」で巨大なジャカード織機を拝見。初期のコンピューターで使用されたパンチカードの原型となる、図柄を織るために用いる型紙「紋紙」を巻き上げながら、高い天井一杯に超極細の糸を張り巡らせ、歴史を刻んだ織機が動く様は圧巻で、迫力と繊細さに魅了されます。そこから高密度で軽量な織地が誕生する様は神秘な儀式を垣間見るようです。

田辺織物 ジャカード織機


田辺織物 ジャカード織機

◎「FUJIHIMURO」(設計：坂牛卓)は、製氷工場で作った氷を貯蔵していた氷室をコンヴァートしたギャラリー。当日は地元の交流拠点として地元の人達が活気あるマーケットを開催中でした。

FUJIHIMURO

◎編物工場の跡地をリノベーションした空間で営む縫製メーカー「Mergen」では、地元発の布地を使用した他にはない一点物の洋服を売っています。「繊維産業の技術の集大成としての洋服」をつくりだすアツい入れ込みようにモノづくりの神髄が感じられ、心が躍ります。

集合写真（Mergen）

◎蔵をリノベーションした「KURA HOUSE FUJIYOSHIDA」。台湾のアーティスト デニス・ローさんが滞在制作されていて、工場からでた廃棄予定の糸を素材として活かしたインスタレーション作品を展示中。ご本人による解説は刺激的な出会いとなりました。

KURA HOUSE FUJIYOSHIDA

◎視察を中締めした後は、機屋さんたちが織物商人の方達を接待する場としてお酒や食事を楽しんだ飲み屋街「西裏」散策です。レトロな雰囲気漂う不思議な魅力に溢れる佇まいの中に、生の営みが活き活きと輝いています。

◎最後は「KURA HOUSE FUJIYOSHIDA」のダイニングスペース「蔵の台所」で、高須賀さんが連絡してくださり、ハタオリマチを紹介するYouTubeの案内人として有名なMr.フジヨシダ（正体は富士吉田市役所の企画部長）や市のふるさと創生室のスタッフ、「ハタオリマチフェスティバル」ディレクター、前述のローさん、Mergenの店長など、街を盛り上げているのコアメンバーが続々と集まってきていただけ、闊達な意見交換の場が実現しました。

特徴的な赤いトタンの屋根が印象的なハタオリマチ。昭和の風情を色濃く残したレトロな商店街などを巡り、地元の方々や参加者の方々との語らいにより参加者全員の「領域が溶かされた」得難い一日となりました。

後日、参加者の皆さんからは、

- 良質の本物に触れられるって面白い。
- 細い糸を水で溶ける糸で補強してから織る驚きの工夫は現地でないと判らない。
- 古いものが活かされている街には、その土地の文化の厚みと時間が堆積した暖かさが感じられる。

などの感想が寄せられました。

同じものを見て、同じ時を過ごし、同じテーマを一緒に議論する、そんな基本的なことの大切さを再確認できたフィールドワークとなりました。

それにしても、よく歩いたし、よく語り合った一日だった〜！

（委員長 萩尾昌則）

集合写真（蔵の台所）